

# 最近の日本語に見られる言語変化の動向

— 「「ら」抜きことば」と「「さ」入れことば」—

栗原 優\*

---

## 目次

---

1. はじめに
  2. 「「ら」抜きことば」の是非
  3. 「「さ」入れことば」
    3. 1. 実態とアンケート調査
    3. 2. アンケート調査の考察
  4. おわりに
- 

## 1. はじめに

「ことばは変化する」といわれるが、「ことば」というものはあくまでも無機物であるので自然に変化することはない。「ことば」が変化するのは、必ずその最初に変化したものを使い始めた人がいるはずである。したがって「ことばは変化する」のではなく、「ことばは変化させられ、その結果、変化する」のである。

近年の日本語におけるめまぐるしい変化として指摘できる現象を幾つかの範疇に分けて考えてみると、

### (1) 話し言葉に見られるアクセントの変化

#### ① 代替延長

---

\* 駿河台大学文化情報学部/日本比較文化学会理事

- ② 上昇口調（疑問口調）
- ③ アクセントの高い位置での後半平板化と平板化延長（英語におけるUp talking現象と同様である。）（1）については、栗原（2000）を参照のこと。
- （2）過度の待遇表現
- （3）これまで見られなかった「使い方」の拡張
- （4）「「ら」抜きことば」、「「ら」入れことば」、「「い」抜きことば」、「「き」入れことば」、「「れ」足すことば」などに見られる文法的な変化
- （5）その他

が挙げられる。

本稿においては、特に（4）を取り上げる。

## 2. 「「ら」抜きことば」の是非

「「ら」抜きことば」に関しては、特に年輩の日本人の間からも、これを嘆く声が多い。彼等（年輩の日本人）は、若者からこの変化が起こっていると考え、この表現が文法的に正しくないという理由で、この表現を使用する若者の言葉を嘆くのである。言うまでもなく「「ら」抜きことば」は「可能」の意味で、

食べ <u>ら</u> れる	⇒	食べれる
見 <u>ら</u> れる	⇒	見れる
開 <u>け</u> られる	⇒	開ける
閉 <u>め</u> られる	⇒	閉める
閉 <u>じ</u> られる	⇒	閉じれる

などのように、下線の「ら」を省略した使い方である。

周知のように「れる・られる」という助動詞は①受動、②尊敬、③自発、④可能という4つの意味を持つ。

しかし「ら」を抜くことによってこれら4つの意味から④の可能の意味のみを独立させるという意味において、換言すれば、意味の混同を防ぎ、それ（可能）以外の意味を排斥することになる。そのため、筆者は、「「ら」抜きことば」は今後も容認されていくであろうと考えている。

上述のように、「ら」抜きことばを「日本語の乱れ」であるというこれを否定する動きもあるが、上記の理由により、「ら」抜きことばは今後も使われていくと考えられ、定着率が増していくのではないかと考えている。

なお「ら」抜きことばは近年の若者から主に使われ始めたという説と共に、その発生には諸説がある。また「ら」抜きことばは、日本を全体的に概観した場合、それが使われる地域に偏りがある。そして、ある地方の方言から全国に広がったというのである。その根拠の一つとして、今から100年以上前、1897（明治30）年発行の『遠江文典（とおとうみぶんでん）』において、「逃げれる」という表現が書かれており、同文書に、

遠江にては られるをつめて れると云ふ

という記述がある。

これを証明するかのよう、現在でも「ら」抜きことばが現れやすい地域を見ると、東海・中部地方にその使用者が多いことが分かる。

この事実を知れば、「ら」抜きことばは首都圏では若者が使い始めた可能性も否定できず、それを年輩の方々が嘆いているという可能性は否定できないが、東京を中心に若者達が最近になって使い始めたのではなく、表現としては、少なくとも一世紀に渡って使われ続けていることが分かる。

平安時代前期には、その僅か150年前に書かれた万葉仮名をどのように読めば良いのかわからず、村上天皇は、学者に命じて訓点をつけて翻訳させたという記録があるが、現在でもそのようなことは全く変わっていない。日本人の中にも今から100年前に書かれた日本語の文書を満足に読むことができる人がどのくらいいるであろうか。

いずれにしても、「ら」抜きことばは、最近になって使用する人の数が増えたことは確かではあるが、近年の日本語の変化というべきものではない。また、若者から中心に起こった変化でもなさそうである。

1970年の時点であっても東京都内の小中学生1,539名に対しての「れる」と「られる」の使用についての調査」においては、その容認度について以下のような結果が出ている。

見られる	—————	64.5%	来られない	—————	41.7%
見れる	—————	9.5%	来れない	—————	10.2%
両方	—————	24.1%	両方	—————	47.5%

(土屋信一「東京都の語法のゆれ」『NHK文研月報』21-9、1971)

このアンケートに答えた、当時「「ら」抜きことばを」の使用を容認していた年齢層は、現在の年齢が既に50歳辺りになっており、また、彼等の子孫の言語選択も彼等を模倣するであろうことが予想されるので、「「ら」抜きことば」を使用する年齢層と使用する人口が、狭くなりまた、減るとは考えにくい。したがって、現在では年齢層を問わず多くの人に使われており、今後もこの傾向は続くと考えられる。

なお、「「ら」抜きことば」に関しては、「「ら」抜き」ではなく、「“ar”抜き」であるという意見があることも紹介しておく。

これは、対象の単語の音素をローマ字で表記すると問題の性格が明らかになるもので、例えば、「見る」「食べる」をそれぞれローマ字にすれば、

「見る」 = mir-u (原形)

「見られる」 = mir-ar-er-u (受動・尊敬・自発・可能)

「見れる」 = mir-er-u (可能 = 「「ら」抜きことば」)

「食べる」 = tab-er-u

「食べられる」 = tab-er-ar-er-u (受動・尊敬・自発・可能)

「食べれる」 = tab-er-er-u (可能 = 「「ら」抜きことば」)

となり、それぞれの下線部の部分“ar”が省略されることにより、可能の意味だけを抽出し、分化するという考え方である。

### 3. 「「き」入れことば」

#### 3. 1. 実態とアンケート調査

日本語の助動詞「せる・させる」には①使役、②尊敬（「せられる」として使用される場合のみ）、という2つの意味がある。そして、「せる」は五段活用動詞との未然形につき、「させる」はそれ以外（下一段活用動詞・上一段活用動詞・カ行変格活用動詞（来る））の動詞の未然形につく。サ行変格活用動詞「する」はそれ自体が「させる」に変化する。なお、「出す」「押す」などの一部の五段活用動

詞が可能の意味を表すとき、それぞれ語幹の部分に直接「せる」がついた形を取り、「出せる」「押せる」という「可能動詞」として独立する。

しかし最近、五段活用動詞であるにもかかわらず、

- 座らさせていただきます。
- 読まさせていただきます。
- 吸わさせていただきますたいのですが。
- 聞かさせていただきますたいのですが。
- 開かさせていただきます。
- 払わさせていただきます。
- 言わさせていただきます。

のような誤用が目立つ。

上記の例は、全て「さ」を省けば文法的に正しい。つまり、「さ」が余分なわけであり、我々はこれを「「さ」入れことば」と呼んでいる。この使い方について、私は否定的にならざるを得ない。つまり、「「さ」入れことば」は文法的にも正しくないばかりでなく、前述の「「ら」抜きことば」のように、「混同しやすい意味を分化する」というような、使用することに対して納得し得る理由が見当たらないのである。

「「さ」入れことば」に関する文化庁の1996年度の調査において、調査対象の33%が「気になる」と答えており、2002年度には、それが57%に増えている。「気になる」という回答が増えている原因は、その表現が使われる頻度が高くなったことにより、その表現を耳にすることが増えたためであろうと考えられる。

また、インターネット上のフリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』(<http://ja.wikipedia.org/wiki/>)においては、2006年12月現在、「日本語の乱れ」の項目として「さ入れ言葉」を取り上げており、次の記述が見られる。

使役動詞に本来不要な「さ」をいれる言葉、敬語（特に謙譲語）に不慣れな人が、過剰に敬意表現を並べてしまうために使われているのではないか、ということから若い世代に多いといわれる。しかし高齢者が正しく話しているという調査がなされたわけでもない。

(下線は筆者)

- 例：・×やらさせていただきます。(正：やらさせていただきます、または単に、させていただきます)
- ・×行かさせていただきます。(正：行かさせていただきます)
- ・×叩かさせられる。(正：叩かせられる)

筆者は、これまでの言語生活経験と、以下に挙げるアンケート調査の結果から、下線部分に疑問を持っている。このアンケートは、筆者が2006年4月から11月にかけて、大学生以上の日本人を対象に、何十歳代の方であることを記していただいた上で行った。

アンケートの内容は次のとおりである。

以下の文の下線部についてお答え下さい。

「座らせていただきます。」

「入らせていただきます。」

「聞かせて下さい。」

「言わせて下さい。」

このような表現を：

Q1：聞いたことがありますか、ありませんか。

① ( ) 聞いたことがある。⇒ (何歳くらいの方が使っていたか ( 歳位) )

② ( ) 聞いたことはない。

Q2：おかしいと思いますか。また、使ったことがありますか。

③ ( ) おかしいと思う。———③a ( ) 使ったことがある。

———③b ( ) 使ったことはない。

④ ( ) おかしいとは思わない。——④a ( ) 使ったことがある。

——④b ( ) 使ったことはない。

⑤ ( ) おかしいかどうか分からない。

このアンケートは、該当する個所に「○」をつけてもらうという簡単なものである。(ただし、Q1の「⇒」以降の( 歳位)のみ数字を書き入れていただいた(空欄可)。また、実際のアンケートにおいては記入者の年齢(何十歳代か)とともに、性別もお答えいただいたが、集計においては考慮に入れなかった。)そして、Q1については、①か②のいずれかに「○」がついているものを有効回答とし、また、Q2については、③(あるいは③aまたは③b)、④(あるいは④aまたは④b)、⑤のいずれかに「○」がついているものを有効回答とした。これらの回答を集計したものが、次の結果である。( )内の数字は被検者が「○」を付けた百分率である。なお、

小数点以下第二位を四捨五入したため、百分率の合計が必ずしも100になっているとは限らない。

		18～22歳 (大学生)	～29歳	30歳代	40歳代	50歳代	60歳～
有効回答数		120人	68人	58人	71人	52人	61人
Q 1	①	7人(5.8)	12人(17.6)	26人(44.8)	33人(46.5)	25人(48.0)	34人(55.7)
	②	113人(94.2)	56人(82.4)	32人(55.2)	38人(53.5)	27人(52.0)	27人(44.3)

		18～22歳 (大学生)		～29歳		30歳代	
Q 2	③	a	4人(3.3)	34人(50.0)	a	4人(5.9)	30人(51.7)
		b	73人(60.8)		b	30人(44.1)	
	④	a	1人(1.0)	19人(28.0)	a	3人(4.4)	20人(34.5)
		b	12人(10.0)		b	16人(25.0)	
	⑤	30人(25.0)		15人(22.1)		8人(13.8)	

40歳代			50歳代			60歳～		
37人(52.1)	a	8人(11.3)	27人(51.9)	a	6人(11.5)	37人(60.7)	a	6人(9.8)
	b	29人(40.8)		b	21人(40.4)		b	31人(50.8)
26人(36.6)	a	11人(15.5)	19人(36.5)	a	8人(15.4)	20人(32.8)	a	7人(11.4)
	b	15人(21.1)		b	11人(21.2)		b	13人(21.3)
8人(11.2)			6人(11.5)			4人(6.6)		

この表のQ1の結果から分かることは、

Q1の結果より、「「さ」入れことば」を聞いたことがあると答えた年代が、大学生よりも年上のいわゆる社会人の年代において急に上がり（大学生では5.8%であったが29歳までの人では17.6%）、30歳代以降においては高い数字（40%以上）で徐々に増えていること。

である。また、Q2の質問の仕方により、

- ③a は、おかしいと思うが使ったことがある。
- ③b は、おかしいと思うから使ったことはない。
- ④a は、おかしいとは思わないから使ったことがある。
- ④b は、おかしいとは思わないが、使ったことはない。
- ⑤ は、おかしいかどうか分からない。

という回答であることが分かる。この結果を概観すると、

- (1) 大学生以上の全ての年齢層において、「「き」入れことば」をおかしいと感じている人の割合が半数以上である。その平均は、有効回答数全体（430人）のうち、242人、つまり、56.3%である。
- (2) これを細かく見ると、大学生と60歳以上の年齢層に、おかしいと感じる割合が特に高く見られる。その反面、大学生より年輩から50歳代の年齢層では、おかしいと感じている割合は50%を少し越える程度である。
- (3) その一方で、「「き」入れことば」を使ったことがあるという答（③aと④aの合計）の割合は、全体の16.3%（70人）であった。しかしこれを30歳代以上の年齢層に限定してまとめてみると、おかしいと思うか否かを問わず、使ったことがあると答えた人は24.0%（242人中58人）にのぼった。
- (4) おかしいと思うが使ったことがある（③a）という回答の割合が高かったのは、30代以上であり、大学生には少ない。
- (5) おかしいと思わないから使ったことがある（④a）という回答の割合が高いのは、40歳代～50歳代である。
- (6) おかしいかどうか分からない（⑤）という回答は、大まかに見て、年齢と共に、減る傾向にある。

他にも様々なことが読み取れるが、これらの結果を考察することにする。

### 3. 2. アンケート調査の考察

Q1の結果より、

「「き」入れことば」は学生の間では余り使われていないのではないかということが推

測される。換言すれば、社会人や大人の社会において使用される頻度が高いのではないかということである。実際にQ1 ①では「聞いたことがある」と回答した人に「何歳くらいの方が使っていたか」を数字で答えるようにしたが、その大多数が、30歳代かそれ以上に集中していた。この結果は、Q2の結果(5)と見事に一致している。

では、「「さ」入れことば」どのような状況下で使われるのであろうか。

多くの場合、「～(さ)せる」は「使役」を意味するが、「さ」が余分に入れられる場合は、その後に「下さい」のような「丁寧な依頼」、あるいは「いただきます」のような「許可を求める」ことばと共に現れる。それゆえ、「させて」という形でしか存在しない。

この、「丁寧な依頼」や「許可を求める」という環境は、まず、その話者が先輩と後輩、上司と部下、などの上下関係にある場合が考えられる。また、筆者も直接耳にした経験があるが、ある学会では、60歳代の報告者が「発表が長くなりますので、座らせていただきます。」とへりくだっていた。このように、「「さ」入れことば」は、長幼を問わずして、また、性別を越えて、

#### ア 過剰な謙讓表現

として使われることがある。日本語を含む殆どどの言語において、敬語というものは、長くなればなるほど丁寧になるということが左右しているのであろうと考えられる。しかし、ある学校を訪問した際に、校長先生が生徒の父母に対して「児童の現状についてしゃべらせていただきます<sup>1)</sup>」と言っているのを聞いた時は驚いた。

#### イ 「させていただく」と「させる」の一人歩き

日本語には「サ行変格活用動詞」が一つ存在する。言うまでもなくそれは「する」

1) 「しゃべらせていただきます」について

「しゃべる」は漢字では「喋る」と表記されるが、この口偏を除いた部分は魚偏をつければ「鰈」、草冠をつければ「葉」というように、「ひらひらとして中身がないもの」を示す。それゆえに「喋る」とは、「(内容のないことを)べらべらと話す」ことを意味する。「おしゃべりしていないで話を聞きなさい」と言えるのはそのためである。したがって、例に挙げた状況のような、校長先生が父母に対して「児童の現状について喋らせていただきます」と言うことは、実際には中身があることを話そうとしている、又、「「さ」入れことば」を使っている、という点で、二重の誤りを含んでいることであり、若者の「言葉の乱れ」を嘆き、正すことを推奨すべき大人がそのような誤用を公の席ですることがあると共に、誤用に気づかずに使っているところにも問題があると考えている。

であるが、この動詞は多くの動作を伴う名詞の語尾につき、複合動詞を形成する。勉強する・料理する・発言する・登場するなどである。これらの複合動詞を使役の形に変えれば「する」の部分はそのまま「させる」となり、勉強させる・料理させる・発言させる・登場させるとなる。この動作を「させて欲しい」場合、それぞれは、「○○させて下さい」「○○させていただきたい」となるであろう。そこでいかなる動詞であっても「させていただく」をつければ正しいという誤解が生れていると考えられる。

また、既に紹介したように、「せる」は五段活用動詞の未然形につき、サ行変格活用動詞（する）を使役にする時には同自然体が「させる」に変化する。「させる」はそれ以外の動詞の未然形につく。しかし、五段活用であっても、終止形が「す」で終わる動詞、「話す」「出す」「押す」などに使役の「せる」がついた場合、それぞれは「話させる」「出させる」「押させる」となるが、これらを「話さーせる」「出さーせる」「押さーせる」と正しく解釈せずに、「話ーさせる」「出ーさせる」「押ーさせる」というように、誤って区切り、あたかも「させる」がついたかのように解釈しているとも考えられる。

なお、どの年齢層においても、おかしいとは思わないが使ったことはない(③b)という回答数が、おかしいとは思わないが使ったことがある(③a)の回答数より多いのは、実際の場面において使う機会がないからであると考えられる。

また、アンケートの結果、当初筆者が想像していたよりも「「さ」入れ言葉」が使われる率が高いこともわかった。

#### 4. おわりに

これまで見てきたように、「「ら」抜きことば」と異なり「「さ」入れことば」はある限られた状況下においてしか現れることはない。したがって、それが歯止めになっているため、言語のレジスターが広がるとは考えにくい。

しかし、本稿の冒頭で述べたように、「ことば」は時代と共に変化させられるものであるから、このような使い方をする人の割合が多くなり、不自然には感じられないほどに市民権を得た時、本来の使われ方は忘れられていくのであろう。

「ことばの変化」というものは、新しい外来語の導入など、語彙的な要素を除いては、若年層から起こることが多い。換言すれば、言葉を変化させるのは、若者たちであることが多い。しかし「「さ」入れことば」の特徴として、アンケート調査で明らかになったように、若者よりも、大人がこれを使う（大人が発信者である）ということは、一

般的な言語変化の常識を打ち破ることである。また、30歳代、40歳代、50歳代よりも大学生の方が正しい知識を持ち、「「さ」入れことば」を「おかしい」と感じていることは特筆すべきことであろう。さらに、「「さ」入れことば」には、階層の区別なく使われるという特徴がある。

アンケートの有効回答数は、430人であったが、これを更に拡大し、更に精査な分析を試みることも必要であろう。また、今回のアンケートを更に分析し、新たな考察をしていくことも可能であると考え。特に、(③a)と答えた人が、おかしいと思うにもかかわらず「「さ」入れ言葉」を使うときの心理的側面などの研究も必要であると考えられる。

## 付記

本論文は、2006年7月7日に行われた第四回韓国日本学連合会（於：韓南大 学校）における口頭発表の内容と一部重複するところがある。当日会場にて沢山の貴重なご意見を頂戴した諸先生方に、感謝申し上げたい。また、檀国大学の片茂鎮教授には特にお世話になった。この場を借りて、深く感謝の意を表したいと思う。

## 【参考文献】

- 東 照二 『社会言語学入門—生きた言葉のおもしろさにせまる』 研究社、1997年6月  
NHK 編 『日本語 発音アクセント辞典』 改訂新版、日本放送出版協会、1985年6月  
栗原 優 「話し言葉に見られるアクセントの変化—その三大傾向—」 『東北学院大学大学院人間情報学研究家年誌』 第5号、2000年5月  
真田信治 編 『社会言語学の展望』 くろしお出版、2006年3月  
真田信治、渋谷勝己、陣内正敬、杉戸清樹 『社会言語学』 おうふう、1992年11月  
田中春美、田中幸子 編著 『社会言語学への招待』 ミネルヴァ書房、1996年4月  
中尾俊夫、日比谷潤子、服部範子 『社会言語学概論』 くろしお出版、1997年3月  
読売新聞社会部 『東京ことば』 読売新聞社、1988年6月

(原則として本文で触れたものは除いた)

住 所：(330-0072) さいたま市浦和区領家6-14-31

電 話：+81-48-825-2766(兼Fax)

e-mail：kurihara@surugadai.ac.jp(研究室)

